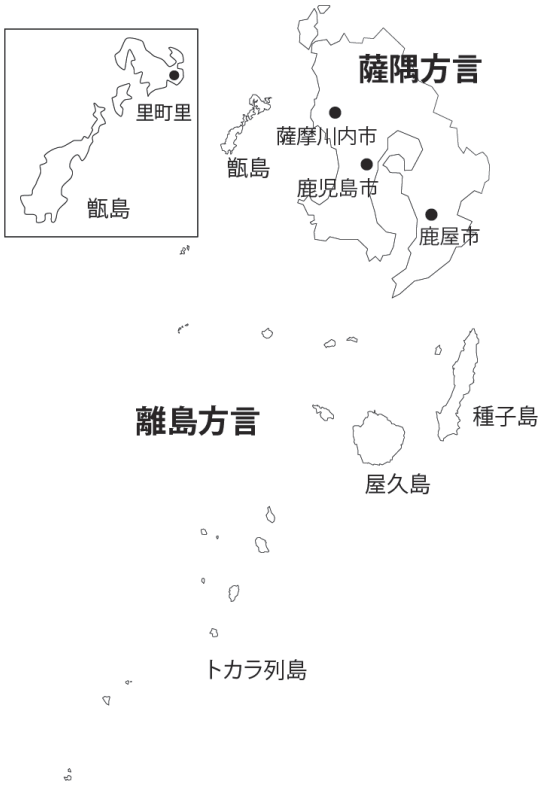
鹿児島県甑島里方言



鹿児島県南九州方言区画図

【鹿児島県の方言区画】鹿児島県ではトカラ列島と奄美大島の間を境に、日本語と（北）琉球語が分かれる。以前は本土方言（あるいは南九州方言）と奄美方言のようにどちらも日本語の方言とみなされることが多かったが、現在では言語的な差異の大きさやユネスコによる危機言語の認定など社会的な状況も加味し、奄美以南のことばを別の言語（（北）琉球語）と認めるのが主流である。いずれにせよ、県内ではここに大きなことばの境界線があることになる。南九州方言は薩摩半島・大隅半島を合わせた薩隅方言、甑島・屋久島・種子島・トカラ列島などの離島方言に二分され、後者はそれぞれ独自の方言を有しているという特徴がある（木部 1997）。

【甑島里方言について】本稿で記述する甑島里方言（以下「里方言」）は離島方言に属す。当該地域は、執筆時の住居表示では、薩摩川内市里町里（さつませんだいしさとちょうさと）にあたる。里方言は日本語方言で初めて体系的な記述を試みた記述文法書が存在し、詳細な記述が残されている（森・平塚・黒木（編）2015）。特にアクセントについては窪薗晴夫氏による一連の研究があり（窪薗 2012 など）、全体的に先行研究の充実した方言であると言える。甑島列島全体の人口は 6,000 人に満たない程度で、そのうち里には約 1,200 人が住んでいる。そもそも多くない話者人口は年々減りつつあり、高年層においても方言的な特徴も失われつつあることから（平塚 2013）、危機的な状況にある方言の 1 つであると言える（窪園 2009、木部 2011）。

なお、後掲する「多段型動詞の基幹音便形」に関わることとして、/ai/、/ii/、/ui/、/ei/、/oi/、/ou/、/au/ は音韻規則を経て、それぞれ[ja:]、[i:]、[i:]、[e:]、[e:]、[o:]、[o:]で実現することがある。詳細については森・平塚・黒木（編）（2015）を参照されたいが、本稿の記述が煩雑にならないよう、ここで記しておく。

【調査概要】本稿の記述は、里で生育し、現在も里に居住する男性話者 1 名（1957 年生まれ）に対する面接調査にもとづいて行う。15 歳以降島外の外住歴が約 20 年あるが、島内に高校や大学はなく、また仕事で島を離れることも多いため、外住歴のない話者を探すほうが困難であるという事情による。用例も話者の作例によるが、一部筆者らが収集したテキストも参考にしている。里方言はジガタ（九州本土，ジカタとも）のことばや共通語の影響もみられるが、先行研究も参考にしながらできる限り伝統的な体系の記述を目指す。特に、森・平塚・黒木（編）（2015）の記述を参考にしたところが大きいが、すべて筆者が改めて話者に問うている。

鹿児島県甑島里方言の活用表

《動詞》

		多段型　書く	二段型　止める	一段型　見る	来る	する
終止類	断定非過去	カク	ヤムイ	ミー	クイ	スイ
	断定過去	キャータ	ヤメタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カカンカ カイテン(カ)	ヤメー ヤメンカ ヤメテン(カ)	ミレ ミランカ ミテン(カ)	ケー ケンカ コンカ キテン(カ)	セー セロ センカ シテン(カ)
	禁止	カクナ	ヤムイナ ヤムンナ	ミーナ ミンナ	クイナ クンナ	スイナ スンナ
	意志	カコー	ヤムー	ミロー	クー コヨー	スー
	推量	カクヨー カコー カクヤロー	ヤムイヨー ヤムー ヤムイヤロー	ミーヨー ミロー ミーヤロー	クイヨー クー コヨー クイヤロー	スイヨー スー スイヤロー
	否定意志	カクミャー カカンミャー	ヤムイミャー ヤメンミャー	ミーミャー ミランミャー	クイミャー ケンミャー コンミャー	スイミャー センミャー
	否定推量	カカンヨー カクミャー カカンミャー	ヤメンヨー ヤムイミャー ヤメンミャー	ミランヨー ミーミャー ミランミャー	ケンヨー コンヨー クイミャー ケンミャー コンミャー	センヨー スイミャー センミャー
接続類	連体非過去	カク	ヤムイ	ミー	クイ	スイ
	連体過去	キャータ	ヤメタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	キャーテ	ヤメテ	ミテ	キテ	シテ
	否定中止	カカジン	ヤメジン	ミラジン	ケジン コジン	セジン
	仮定	カクギー(ナ／ニ／ニャ) カケバ キャータラ カクナラ	ヤムイギー(ナ／ニ／ニャ) ヤムレバ ヤメタラ ヤムイナラ	ミーギー(ナ／ニ／ニャ) ミレバ ミタラ ミーナラ	クイギー(ナ／ニ／ニャ) クレバ キタラ クイナラ	スイギー(ナ／ニ／ニャ) スレバ シタラ スイナラ
派生類	否定	カカン	ヤメン	ミラン	ケン コン	セン
	丁寧	カキモス	ヤメモス	ミーモス	キモス	シモス
	使役	カカスイ カカス	ヤメサスイ ヤメサス	ミサスイ ミサス ミラスイ	キサスイ キサス キラスイ コラスイ コラス コサスイ コサス	サスイ サス
	受身	カカルイ	ヤメラルイ	ミラルイ	コラルイ	サルイ
	可能	カキキー カキガナイ カカルイ カキダス カクイ	ヤメキー ヤメガナイ ヤメラルイ ヤメダス	ミキー ミーガナイ ミラルイ ミダス	キキー キガナイ コラルイ キダス	シキー シガナイ サルイ シダス
	尊敬	カッキャイ	ヤメヤイ	ミーヤイ	キヤイ	シヤイ
	継続	カキオイ キャートイ	ヤメオイ ヤメトイ	ミーオイ ミトイ	キオイ キトイ	シオイ シトイ
	希望	カコーゴタイ	ヤムーゴタイ	ミローゴタイ	クーゴタイ	スーゴタイ
	のだ	カクト	ヤムイト	ミート	クイト	スイト

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例		活用形例（過去形）	作り方
k	書く	kak·u	キャー-タ	k を i にする（＋音韻規則適用）。「行く」は例外（本文参照）。
g	脱ぐ	nug·u	ニー-ダ	g を i にする（＋音韻規則適用）。-タが-ダになる。
s	出す	das·u	デャー-タ	s を i にする（＋音韻規則適用）。
t/c	立つ	tac·u	タッ-タ	t/c を Q（促音）にする。
n	死ぬ	sin·u	シン-ダ	n を N（撥音）にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ	tob·u	トー-ダ	b を u にする（＋音韻規則適用）。-タが-ダになる。
m	飲む	nom·u	ノー-ダ	m を u にする（＋音韻規則適用）。-タが-ダになる。
r	切る	kir·u	キッ-タ	r を Q（促音）にする。
w/ø	買う	ka(w)·u	コー-タ	w を u にする（＋音韻規則適用）。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か（だ） 形容詞型	名詞型	学生[ガクセー](だ)
終止類	断定非過去	アカカ アカサー	シズカカ	シズカヤイ	学生ヤイ
	断定過去	アカカッタ	シズカカッタ	シズカヤッタ	学生ヤッタ
	推量	アカカロー アカカ(イ)ヨー アカカヤロー	シズカカロー シズカカ(イ)ヨー シズカカヤロー	シズカヤイヨー シズカヤロー	学生ヤイヨー 学生ヤロー
接続類	連体非過去	アカカ	シズカカ	シズカナ	《学生ノ》 《学生ン》
	連体過去	アカカッタ	シズカカッタ	シズカヤッタ	学生ヤッタ
	中止	アコーシテ アカコーシテ	シズコーシテ	シズカデ	学生デ
	仮定	アカカギー(ナ／ニ／ニャ) アカカリャー アカカッタラ アカナナラ	シズカカギー(ナ／ニ／ニャ) シズカカリャー シズカカッタラ シズカカナラ	シズカヤイギー(ナ／ニ／ニャ) シズカヤレバ シズカヤッタラ シズカナラ	学生ヤイギー(ナ／ニ／ニャ) 学生ヤレバ 学生ヤッタラ 学生ナラ
	否定	アコーナカ アカコーナカ	シズコーナカ	シズカジャ(ー)ナカ シズカヤナカ	学生ジャ(ー)ナカ 学生ヤナカ
派生類	なる	アコーナイ アカコーナイ	シズコーナイ	シズカーナイ	学生ニナイ
	丁寧	アカカ(イ)モス	シズカカ(イ)モス	シズカヤイモス	学生ヤイモス
	尊敬	アッカヤイ	(該当形　欠)	(該当形　欠)	学生ヤイヤイ
	のだ	アカカト	シズカカト	シズカヤイト	学生ヤイト

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」)、基幹二段型（以下「二段型」）があり、所属語彙は少ないが基幹一段型（以下「一段型」）もある。多段型には a 類動詞（「書く」・「居る」・「死ぬ」など）が所属する。一段型には b 類うち「見る」「着る」「煮る」「起きる」「生きる」などおおよそ古典語の上一・二段動詞が、二段型には b 類のうち「止める」「開ける」などおおよそ古典語の下二段動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ・オ段の 5 形、および、音便形がある。「カク」（書く）の場合、カ

カ-ン（kak·a-N）、カキ-キー（kak·i-kiR）、カク（kak·u）、カケ-バ（kak·e-ba）、カコ-ー（kak·o-R）、キャー-タ（kjaR-ta）など。また、語幹末子音には、k（カ行）、g（ガ行）、s（サ行）、t（タ行）、n（ナ行）、b（バ行）、m（マ行）、r（ラ行）、w（ワ行）がある。語例は表「多段型動詞の基幹音便形」を参照。

一段型の基幹にはイ段がある。「ミー」（見る）の場合、ミ-ー（m·i-i <m·i-ru）、ミ-タ（m·i-ta）などとなるが、否定形および否定中止形では r 語幹化したミ-ラン（m·i-raN）、ミ-ラジン（m·i-raziN）などとなる。

二段型の基幹にはウ・エ段の 2 形がある。「ヤムイ」（止める）の場合、ヤム-イ（jam·u-i < jam·u-ru）、ヤム-ー（jam·u-R）、ヤメ-タ（jam·e-ta）、ヤメ-ン（jam·e-N）など。なお、否定形および否定中止形のときは、「ヌイ」（寝る）、「ズイ」（出る）のみ、多段型 r 語幹動詞に対応した形、ネラン（n·e-raN）、ネラジン（n·e-raziN）、デラン（d·e-raN）、デラジン（d·e-raziN）のようになる（森・平塚・黒木（編）2015）。また、「オルイ」（下りる）の一語のみ、伝統的な基幹オル（or·u）、オレ（or·e）に加えて、外来のオリ（or·i）も定着したことで、基幹末母音がイ・ウ・エの 3 段に交替していることになる（森・平塚・黒木（編）2015）。一方、上で「一段型」とした「ミー」（見る）、「キー」（着る）、「オキー」（起きる）の 3 語は基幹末母音が交替せず、一貫してイ段となる。

福岡市方言（平塚 2014）など九州の一部の方言では、いわゆる連用形命令の「ミリ（ー）」「アケリ（ー）」などの r 語幹化したイ段形があるが、この方言にはそのような形はない（イ段・エ段基幹が用いられる）。また、基幹が 3 段に交替する「下りる」は、r 語幹化した形においても外来の orir という語幹が定着しており、伝統的な orur と交替する（森・平塚・黒木（編）2015）。

不規則な活用をする動詞に「クイ」（来る）と「スイ」（する）がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クイ」は、キ-タ（k·i-ta）、ク-イ（k·u-i < k·u-ru）、ケ-ー（k·e-R < k·o-i）、コ-ン（k·o-N）などのように、基幹が「キ」「ク」「ケ」「コ」の 4 段に、「スイ」は、サ-ルイ（s·a-rui）、シ-タ（s·i-ta）、ス-イ（s·u-i < s·u-ru）、セ-ン（s·e-N）などのように、基幹が「サ」「シ」「ス」「セ」の 4 段にわたる。

（2）各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

共通語同様、断定非過去形と連体非過去形の区別はなく、「カク」「ヤムイ」「ミー」「クイ」「スイ」となる。前述のとおり、/ru/は[i]で実現する。「止める」のような二段型動詞は、ここではウ段形をとる。

・コレカラ　アンガエ　クイデー。（これからおまえの家に行くから。）

〈断定過去形〉

共通語同様、断定過去形と連体過去形の区別はなく、「キャータ」「ヤメタ」「ミタ」「キタ」「シタ」となる。前述のとおり、多段型動詞基幹音便形での/ai/の母音連続は[ja:]で実現する。また、「止める」のような二段型動詞は、ここではエ段形をとる。

・シュージバ　オテホンノゴト　ジョーズニキャータ。（習字をお手本のように上手に書いた。）

後述する中止形にも同じことが言えるが、多段型動詞のうち共通語とちがった音便をとるのは、s 語幹、b 語幹、m 語幹、w/ø 語幹である（前掲「多段型動詞の基幹音便形」の表参照）。それぞれ i（ダス→デャータ（＜ダイタ））、u（トブ→トーダ（＜トウダ））、u（ノム→ノーダ（＜ノウダ））、u（カウ→コータ（＜カウタ））のようになる。しかしながら、特に b 語幹や m 語幹は少しずつ共通語化し、「トンダ」や「ノンダ」などが聞かれるようになってきている。

〈命令形〉

「カケ」「ヤメー」「ミレ」「ケー」「セー」のようになる。「～テ」で終わる中止形や学校文法の連用形にあたる形を命令として用いることはない。二段型・一段型動詞や「する」は r 語幹化した形をとるのが特徴的である。「ヤメー」は「ヤメレ」を、「ケー」は「コイ」を、「セー」は「セレ」を基底形としており、音韻的な変化を経て実現している。

また、「カカンカ」「ヤメンカ」「ミランカ」「コンカ」「センカ」のように、九州方言に広くみられる否定形にカのついた形も命令として機能する。

このほか、「カイテン（カ）」「ヤメテン（カ）」「ミテン（カ）」「キテン（カ）」「シテン（カ）」もある。カの有無は意味のちがいには関与しない。

・ハヨー　コッチー　キテンカ。（早くこっちにきて。）

「キヤイモイテン（カ）」のように、尊敬語「ヤル」と丁寧語「モス」を用いれば目上のに対しても使うことができる。なお、「カカイ」「ミサイ」など-(s)aiという接辞も命令として機能していたが、現在では使用する話者はいないようである（森・平塚・黒木（編）（2015））。

〈禁止形〉

「カクナ」「ヤムイナ／ヤムンナ」「ミーナ／ミンナ」「クンナ」「スイナ／スンナ」のようになる（2つ並んでいる形式の意味的なちがいはない）。

・アン　ミセー　イタテモ　アラー　カウナ。（あの店に行ってもあれは買うな。）（森・平塚・黒木（編）2015）

〈意志形〉

「カコー」「ヤムー」「ミロー」「クー」「スー」のようになることから、多段型動詞はau、二段型動詞および「来る」「する」はuを接辞として用いる。一段型動詞は「ミロー」となることから、r語幹化した形をとることがわかる。なお、「来る」については「コヨー」という語形も存在する。

・カンソーブンバ　カコーテ　オモータイバ　ゲンコーヨーシガ　ナカッタ。（感想文を書こうと思ったら原稿用紙がなかった。）

・シュクダイバ　ハヨー　スー。（宿題を早くしよう。）

〈推量形〉

推量専用の「ヨー」という接語が存在し、「カクヨー」「ヤムイヨー」「ミーヨー」「クイヨー」「スイヨー」などともなる（確認要求にも使用される）。意志形としても用いられる「カコー」「ヤムー」「ミロー」「クー」「スー」が推量も表すことがあるが、談話などにはほとんど現れないようである。これに加え、また、最近では外来の「ヤロー」という形式も入ってきている。

・ニシモ　アイチャーワ　クイヨー。（あの人も明日は来るだろう。）

・アッコモ　クイヨーガ？（おまえも来るだろう？）

〈否定意志形〉

「マイ」に由来する接語「ミャー」を使用し、「カクミャー」「ヤムイミャー」「ミーミャー」「クイミャー」「スイミヤー」などとなる。ただし平塚（2014）の記述にある福岡市方言同様、肯定形に「ミャー」がつくのはやや古めかしくなってきており、代わりに否定形につけ、「カカンミャー」「ヤメンミャー」「ミランミャー」「ケンミャー／コンミャー」「センミャー」などと言うのが一般的になってきている。

・コンドコサー　{チコクスイミャー／チコクセンミャー}テ　オンムータ。（今度こそは遅刻しないでおこうと思った。）

〈否定推量形〉

前掲の推量形で記述した「ヨー」を否定形に接続させることで否定推量を表す。また、否定意志形で記述した「ミャー」も肯定形または否定形に接続させることで否定推量を表す。

・アガン　トケーニャ　イカンミャー。（あんなところには行かないだろう。）（森・平塚・黒木（編）2015）

〈連体非過去形〉

上述のとおり断定非過去形と同形である。

〈連体過去形〉

上述のとおり断定過去形と同形である。

〈中止形〉

「キャーテ」「ヤメテ」「ミテ」「キテ」「シテ」などとなる。音便については前述の過去形と同様のことがあてはまる。

・タッカ　トコイカラ　トーデ　アーシバ　ケガシタ。（高いところから飛んで足をけがした。）

〈否定中止形〉

薩摩地方を中心に分布する「～ジン」を使用し、「カカジン」「ヤメジン」「ミラジン」「ケジン／コジン」「セジン」などとなる。

・セッカクヤッタテー　アワジン　ザンネンヤッター。（せっかくだったのに会わずに残念だったなあ。）（森・平塚・黒木（編）2015）

〈仮定形〉

仮定形を作る形式は多く、西九州の一部にしか存在しない「ギー」の使用もみられる。「ギー」は「ギーナ」「ギーニ」「ギーニャ」などのバリアントも存在し、テンスの対立がある（例文ではギーを代表させる）。同様に、「ナラ」にもテンスの対立がある。

・クシキノイ　{イクギー／イクナラ}　イッ

ショキ　イコー。（串木野に行くなら一緒に行こう。）

・メーシバ　{クタギー／クタナラ}　ハモ　ミガケヨ。（ご飯を食べたら歯も磨きなさいよ。）

「～タラ」は外来的な響きがあるといい、特に「～したらいい」のような構文ではまず現れることはない。

・アンガ　{イクギー／イケバ／×イッタラ}　ヨカ。（自分（あなた）が行けばいい。）

また、「～バ」は共通語のそれよりも用法が広いことがわかっている。たとえば次のような事実的複文でも用いることができる。

・テガミバ　ダセバ　イッキー　ヘンジン　キター。（手紙を出したらすぐに返事がきた。）（森・平塚・黒木（編）2015）

さらに、「～タ（イ）バ」という形で過去テンスをとることもできる。この「～バ」の詳細については、森・平塚・黒木（編）（2015）の記述を参照されたい。

〈否定形〉

「カカン」「ヤメン」「ミラン」「ケン／コン」「セン」などとなる。一段型動詞は r 語幹化した形をとることになる。

・ソガンタ　ムズカイカ　ホンワ　オラー　ヨマン。（そんなむずかしい本は私は読まない。）

〈丁寧形〉

「～モス」を用いた「カキモス」「ヤメモス」「ミーモス」「キモス」「シモス」などとなる。

・ワシガ　サーキー　シモスデー。（私が先にしますから。）

〈使役形〉

「～スイ／～ス」を用いた「カカスイ／カカス」「ヤメサスイ／ヤメサス」「ミサスイ／ミサス」「キサスイ／キサス」「サスイ／サス」などを基本とするが、一段型動詞と「来る」は r 語幹化した「ミラスイ」「コラスイ」といった語形も存在する。

・ソガンタ　コト　ユーオイギー　マタ　{キサスイ／コサスイ／コラスイ}デーナー。（そんなこと言ってたらまた来させるからな。）

〈受身形〉

「カカルイ」「ヤメラルイ」「ミラルイ」「コラルイ」「サルイ」などとなる。

・マタ　ワルグチバ　ユワルイドー。（また悪口を言われるよ。）

〈可能形〉

里方言は可能形に富み、「～キー」「～ガナイ」「～（ラ）ルイ」「～ダス」の 4 つがさまざまな意味を担っている（「～（ラ）ルイ」は学校文法の未然形（多段型のア段形、二段型・一段型動詞の基幹）、その他は連用形（多段型のイ段形、二段型・一段型動詞の基幹）に接続）。このうち「～キー」は能力可能の専用形式である。また、多段型動詞は共通語の影響を受けた可能動詞「カクイ」なども聞かれるようになってきている。

・アッカー　クルマ　ウンテン　シキートン？（おまえは車を運転できるの？）

・プーリー　ミズン　ハイットイデー　オジガルイドー。（プールに水が入っているから泳げるよ。）

・モー　ゴジヤイバッテカ　カイダスチューン？（もう 5 時だけど買えるの？）

〈尊敬形〉

「～ヤイ」を用いた「カッキャイ」「ヤメヤイ」「ミーヤイ」「キヤイ」「シヤイ」などがある。二段型・一段型動詞は基幹につく。

・アンフター　シュージバ　アジロイコー　カッキャイデー　アン　フテー　タノモー。（あの人は習字をきれいにお書きになるから、あの人に頼もう。）

なお多段型の場合、語幹末子音ごとに音韻規則（詳細は森・平塚・黒木（編）2015 を参照）が適用され、k は「カッキャイ（書く）」、g は「ヌッギャイ（脱ぐ）」、s は「ダッシャイ（出す）」、t/c は「タッチャイ」、n は「シンニャイ（死ぬ）」、b は「トッビャイ（トブ）」、m は「ノンミャイ（飲む）」、r は「キーヤイ（切る）」、w/ø は「カイヤイ（買う）」となる（ただし話者によってはこの規則が適用されないこともある）。また二段型動詞でも、語幹が 2 音節以上であれば、「ナンギャイ（投げる）」のように規則がはたらく（森・平塚・黒木（編）2015）。

〈継続形〉

多くの西日本方言同様、ヨル／トルの対立を持ち、前者は「カキオイ」「ヤメオイ」「ミーオイ」「キオイ」「シオイ」などとなり進行を、後者は「キャートイ」

「ヤメトイ」「ミトイ」「キトイ」「シトイ」などとなり結果を表す。なお、「～オイ」は「～ヨイ」というバリアントも持つ。

・ナンバ　シオイト？（何をしてるの？）

・モー　ネトイトヤ？（もう寝てるの？）

〈希望形〉

意志・推量形に「ゴタイ（＜ゴト　アイ）」がついた「カコーゴタイ」「ヤムーゴタイ」「ミローゴタイ」「クーゴタイ」「スーゴタイ」などのようになる。

・アン　ワローバ　クラワソーゴタイ。（あいつを殴ってやりたい。）

〈のだ形〉

疑問文では「カクト？」などのように準体助詞トで文を終えることができるが、平叙文では何らかの終助詞がつくか、「カクチャイドー（＜カクトヤイドー）」のように、準体助詞トにコピュラ（学校文法の断定の助動詞）「ヤイ」をつけ、さらに何らかの終助詞をつけるのがふつうであり、トで言い切るのは不自然である（ただし若い世代では聞かれることがある）。なお、準体助詞トにコピュラ「ヤイ」がつくと、「チャイ」「タイ」「サイ」という3つのバリアントが現れ、どれを用いるかは里のなかでも個人差が激しい。

・オーミソカニャー　トクトクジンドンガ　｛キヤイチャイ／キヤイタイ／キヤイサイ｝ドー。（大みそかには歳徳神さまがいらっしゃるんだよ。）

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

いわゆるカ語尾を用い、動詞的な接辞をとりやすい。また、中止形・否定形・なる形では、語幹末母音がa、iの場合に交替語幹を用いた形がある。語幹末がu、oの場合は交替がない。語幹末がeの語は存在しない。下表はなる形の例を示している。

語幹末母音	交替後	例
a	o	アカカ　アコーナイ ナカ　ノーナイ
i	ju	セワシカ　セワシューナイ セカラシカ　セカラシューナイ
u	u	ウーカ　ウーナイ ウスカ　ウスーナイ
o	o	フトカ　フトーナイ シロカ　シローナイ

〈断定非過去形〉

いわゆるカ語尾をとる方言であり、「アカカ」のようになる。断定と連体の場合の形のちがいはない。

・ミナター　ヒトノ　ウーカ。（港は人が多い。）

また、九州方言に広く分布するいわゆる詠嘆のサ語尾も存在する。

・アン　フトン　カエッテクイトン　ハヤサ。（あの人は帰ってくるのが早いなあ。）

〈断定過去形〉

共通語と同形の「アカカッタ」が用いられる。非過去形同様、断定と連体の場合の形のちがいはない。

・コニャーダマデ　アッカー　マダ　コガンチンカッタドー。（こないだまでおまえはまだこんなに小さかったよ。）

〈推量形〉

前述の動詞の推量形にもつく「ヨー」が形容詞にもつき、「アカカ（イ）ヨー」などとなる。このとき、イの有無は意味のちがいに関与しない。さらに、やはり動詞同様、分析的な「ヤロー」も使用されるようになってきており、「アカカヤロー」などとなる。確認要求としても用いられる。

・アン　フター　ナマノ　｛ネブカイヨー／ネブカヤロー｝。（あの人はすごく眠いだろう。）

・アッカー　ネブカイヨーガ？（おまえは眠いだろう？）

また、動詞型の活用をする「アカカロー」などもある。

・オークチャー　フヤー　ヒヤカロー。（大口は冬は寒いだろう。）

〈連体非過去形〉

上述のとおり断定非過去形と同形である。

〈連体過去形〉

上述のとおり断定過去形と同形である。

〈中止形〉

交替語幹の長音形「アコー」などに、動詞「する」に由来する中止形「シテ」がついた「アコーシテ」のようになる。

・ナマノ　ヌッコーシテ　シャツバ　ニーダー。（すごく暑くてシャツを抜いた。）

なお、後述の否定形およびなる形にも同じことが言えるが、ナカ、ヨカ以外の形容詞は「アカコーシテ」のように、「アカカ」という語全体を語幹であるかのようにとらえ、「コーシテ」を使い活用させる現象もみられる。ただし、詳細は未調査でよくわかっていない。

〈仮定形〉

動詞同様語形に富み、「アカカギー（ナ／ニ／ニャ）」「アカカリャー（アカカレバ）」「アカカッタラ」「アカカナラ」などとなる。

・グウャーノ　ワイカレバ　マタ　ユーテクレー。（具合が悪かったらまた言ってくれ。）

〈否定形〉

交替語幹の長音形に「ナカ」のついた「アコーナカ」などとなる。前述の中止形同様、一部の動詞は「アカコーナカ」のように語全体が語幹ととらえられ、活用する場合もある。

・アンガ　ツラー　ソガン　ア（カ）コーナカドー。（あなた（自分）の顔はそんなに赤くないよ。）

〈なる形〉

否定形と同じく交替語幹長音形を用い、「アコーナイ」などとなる。前述の中止形、否定形同様、「アカコーナイ」などとなる形容詞もある。

・イッキー　ヒヤケシテ　ア（カ）コーナイ。（すぐに日焼けして赤くなる。）

〈丁寧形〉

動詞と同様「～モス」を使い、「アカカイモス（<アカカリモス）」などとなる。これは形容詞を動詞的に活用させるカ語尾のはたらきによるが、最近では「アカカモス」のように終止形に「～モス」をつける言い方が増え、「～モス」は接語のようにふるまうようになっている。

・ハシーギー　ハヤカ（イ）モス。（走ったら早いです。）

〈尊敬形〉

一部の形容詞にのみ尊敬形が存在し、動詞と同様に「～ヤイ」を用いた「アカカヤイ」などとなる。

・センセーワ　セン　タッカヤイ。（先生は背がお高い。）

〈のだ形〉

動詞同様疑問文でなれければ準体助詞トで言い切ることはまずなく、何らかの終助詞をともなうか、コピュラ「ヤイ」をつけたうえで終助詞をつけるのがふつうである。

・イタン　ウスカトン？（板が薄いの？）

・ナマナ　ヌッカ｛チャイ／タイ／サイ｝ドー。（すごく暑いんだよ。）

【形容名詞述語】

里方言においてこの品詞に属する語には、一部形容詞的な活用を多くとるものがある。どういった語が形容詞型の活用をとりやすいのかは明らかになっていないが、ここでは「静か（だ）」を例にとり、形容詞型と名詞型の両者について記述していく。ただし、尊敬形が使用されることはまれだと思われるため、ここでは表からも外し、記述は行わないことにする。

〈断定非過去形〉

形容詞型では断定と連体の形態的なちがいはなく「シズカカ」などとなるが、連体形が用いられることはほとんどない。名詞型は「シズカヤイ」となるが、連体形としては用いられない。

・コカー　ナマノ　｛シズカカ／シズカヤイ｝。（ここはすごく静かだ。）

〈断定過去形〉

形容詞型も名詞型も「～タ」を用い、「シズカカッタ」「シズカヤッタ」となる。やはり断定と連体の形態的なちがいはないが、形容詞型は連体形としてはほとんど用いられない。

・トショカンワ　ダイモ　オランデー　｛シズカカッタ／シズカヤッタ｝。（図書館は誰もいないから静かだった。）

〈推量形〉

形容詞型では「シズカカロー」「シズカカ（イ）ヨー」、名詞型では「シズカヤイヨー」などとなる。動詞と形容詞の場合同様、やはり最近では「ヤロー」を用いて「シズカカヤロー」「シズカヤロー」も聞かれる。

・ヤスミヤイデー　｛シズカカロー／シズカカ（イ）ヨー／シズカヤイヨー／シズカカヤロー／シズカヤロー｝。（休みだから静かだろう。）

〈連体非過去形〉

「シズカナ」が用いられるが、「～ナ」の使用はまれなようである。断定非過去形と同形の形容詞型「シズカカ」もあるが、連体形としての使用は稀である。

・カンタ　ヒローシテ　シズカカ　ヘヤー　フトイデ　トマイター　オトロイカ。（こんな広くて静かな部屋に一人で泊まるのは怖い。）

〈連体過去形〉

上述のとおり、断定過去形と同形だが、名詞型「～ヤッタ」が主で、形容詞型「～カッタ」は連体形としてはほとんど用いられない。

・フトイノ　｛シズカカッタ／シズカヤッタ｝ヘヤモ　アイドガ　キテ　ウーサワギョ。（一人の静かだった部屋もあいつらが来て大騒ぎだよ。）

〈中止形〉

形容詞型で「シズコーシテ」、名詞型で「シズカデ」となる。

・イタタイバ　｛シズコーシテ／シズカデ｝　ヨカッタ。（行ったら静かでよかった。）

〈仮定形〉

動詞・形容詞同様「ギー（ナ／ニ／ニャ）」「～バ」「～タラ」「ナラ」を使い、形容詞型であれば「シズカカギー（ニャ）」「シズカカリャー」「シズカカッタラ」「シズカカナラ」、名詞型であれば「シズカヤイギー（ニャ）」「シズカヤレバ」「シズカヤッタラ」「シズカナラ」などとなる。

・マチット　｛シズカカギー（ニャ）／シズカカリャー／シズカカッタラ／シズカヤイギー（ニャ）／シズカヤレバ／シズカヤッタラ｝ヨカッタテーナー。（もうちょっと静かだったらよかったのになあ。）

〈否定形〉

形容詞型は「シズコーナカ」などとなる。名詞型で「シズカジャ（ー）ナカ」となったり「シズカヤナカ」となったりするが、両者の関係性については不明である。

・ナツヤスミワ　｛シズコーナカ／シズカジャ（ー）ナカ／シズカヤナイ｝。（夏休みは静かじゃない。）

〈なる形〉

形容詞型は「シズコーナイ」、名詞型は「シズカーナイ」となる。ここでは名詞型は「ニ」という助詞が音的に融合している。

・ガイギーニャ　イッキー　｛シズコーナイ／シズカーナイ｝。（怒るとすぐに静かになる。）

〈丁寧形〉

動詞・形容詞同様「～モス」を用い、形容詞型は「シズカカ（イ）モス」、名詞型は「シズカヤイモス」となる。前者のイの有無は、形容詞の場合と同様、連用形接続か終止形接続かというちがいである。やはりイがあるほうが古い言い方である。

・ヤマン　ナカー　｛シズカカ（イ）モス／シズカヤイモス｝。（山の中は静かです。）

〈のだ形〉

動詞・形容詞同様、準体助詞「ト」に終助詞がつくか、さらにコピュラ「ヤイ」をつけ終助詞がつくかのパターンをとる。準体助詞トで終えるのは平叙文では不自然である。

・マチン　ナカヤイテー　｛シズカカ／シズカヤイ｝トン？（街のなかなのに静かなの？）

・ヘヤン　ナカー　｛シズカカ／シズカヤイ｝｛チャイ／タイ／サイ｝ドー。（部屋のなかは静かなんだよ。）

【名詞述語】

白岩・平塚（2009）によると、特に九州方言は名詞述語において（非過去のとき）コピュラで文を終止することができないことが多いが、里方言ではコピュラ「ヤイ」で文を終止することができる。他方言の多くのコピュラとちがい、里方言のコピュラは形態的になんら動詞と変わらないことからそうなっている可能性がある。ただし、派生力に欠け、派生接辞は尊敬語「～ヤイ」と丁寧語「～モス」しかとることができない（森・平塚・黒木（編）2015）。

〈断定非過去形〉

「ガクセーヤイ」などとなる。

・アイチャーワ　ハレヤイ。（明日は晴れだ。）

〈断定過去形〉

断定と連体のちがいはなく、「ガクセーヤッタ」などとなる。

・キノン　バンワ　イーフネヤッタ。（昨日の晩は入り船だった。）

〈推量形〉

ここでまで挙げてきた品詞同様、「ヨー」を用いて「ガクセーヤイヨー」などとなる。また、「ヤロー」も用いられることがある。

・コンドン　アカチャンワ　タブン　オナゴンコ｛ヤイヨー／ヤロー｝ナー。（今度の赤ちゃんはたぶん女の子だろうなあ。）

〈連体非過去形〉

共通語と同様、「ガクセーノ」などとなる。

・ガクセーノ　トーキャー　ベンキョーセニャイカン。（学生のときは勉強しないといけない。）

〈連体過去形〉

上述のとおり、断定過去形と同形である。

・ガッコーノ　センセーヤッタコトン　アイドー。（学校の先生だったことがあるよ。）

〈中止形〉

「デ」を用い「ガクセーデ」などとなる。

・コイガ　コスモスデ　アイガ　キク。（これがコスモスであれが菊だ。）

〈仮定形〉

名詞でもやはり「ギー（ナ／ニ／ニャ）」「～バ」「～タラ」「ナラ」を使用し、「ガクセーヤイギー（ナ／ニ／ニャ）」「ガクセーヤレバ」「ガクセーヤッタラ」「ガクセーナラ」となる。

・チョーナン｛ヤイギー（ニャ）／ヤレバ／×ヤッタラ｝　イエバ　ツガニャー　ナラン。（長男だから家を継がないといけない。）

〈否定形〉

「ジャ（ー）ナカ」や「ヤナカ」を用い、「ガクセージャ（ー）ナカ」「ガクセーヤナカ」などとなる。

・マーダ　ナツヤスミ｛ジャ（ー）ナカ／ヤナカ｝。（まだ夏休みじゃない。）

〈なる形〉

「ガクセーニナイ」などとなる。

・ダイヒョーセンシュニ　ナイトガ　ユメヤイ。（代表選手になるのが夢だ。）

〈丁寧形〉

やはり「～モス」を使用し、「ガクセーヤイモス」などとなる。

・アン　フトガ　シャチョーヤイモス。（あの人が社長です。）

〈尊敬形〉

非常にまれであるが、森・平塚・黒木（編）（2015）には、1 例のみ以下のような使用例がある。最初の「～ヤイ」はコピュラ、次の「～ヤイ」は尊敬語である。

・ココン　フトヤイヤイナー。（ここの人でいらっしゃるな。）

〈のだ形〉

これまで述べてきた品詞同様、平叙文で準体助詞「ト」で文を終えるのは不自然であり、何らかの終助詞をともなうか、「ト」の後にコピュラが続き、さらに終助詞を後接させる必要がある。

・アッカー　ショーガクセーヤイトン？（おまえは小学生なの？）

・アン　フトガ　オクサンヤイ｛チャイ／サイ／タイ｝ドー。（あの人が奥さんなんだよ。）

参考文献

木部暢子（1997）「総論」平山輝男編『日本のことばシリーズ 46　鹿児島県のことば』明治書院

木部暢子（2011）「鹿児島県甑島方言」木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛『文化庁委託事業　危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業　報告書』国立国語研究所

窪園晴夫（2009）「次世代の音声研究」『言語』38-12 明治書院

窪園晴夫（2012）「鹿児島県甑島方言のアクセント」『音声研究』16-1　日本音声学会

白岩広行・平塚雄亮（2009）「名詞述語に繋辞動詞は必要か―繋辞動詞の使用頻度に認められる方言差―」『日本語文法学会第 10 回大会発表予稿集』日本語文法学会

平塚雄亮（2013）「甑島方言の言語変化」『日本語学会 2013 年度秋季大会発表予稿集』日本語学会

平塚雄亮（2014）「福岡県福岡市方言」方言文法研究会（編）『全国方言文法辞典資料集（2）活用体系』科研費報告書

森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）（2015）『甑島里方言記述文法書』国立国語研究所

（平塚雄亮）